

タイトル	送る言葉(退職記念)
著者	濱, 忠雄
引用	北海学園大学人文論集, 42: 35-36
発行日	2009-03-25

送る言葉

濱 忠 雄

英米文化学科土屋博教授が2009年3月31日をもってご退職されるにあたり、送る言葉を述べさせていただきます。

土屋教授は、2002年3月に北海道大学大学院文学研究科教授（文化価値論講座）を定年でご退職後、ただちに本学人文学部教授として着任されました。土屋教授は、また、設置構想中だった大学院文学研究科英米文化専攻の要となるスタッフとして期待されておりましたから、2003年に修士課程が、2005年に博士（後期）課程が開設された後には、両課程の研究指導教授を併任されました。そして、学部では「ヨーロッパ文化論」などの講義と演習を、大学院では「西洋思想文化」の特殊講義と演習、特殊研究を担当して、多くの学生・院生を育てられました。

土屋教授は、ご自身の研究分野を簡潔には「宗教学・キリスト教学」と表記しておられました。それは狭い意味での「宗教学」でも「聖書学」でもありません。学部生の演習所属ガイダンスの際には、次のように自己紹介されたことを記憶しています。「ヨーロッパの思想文化を『宗教』と呼ばれる人間の営みを切り口として多角的に考察することです。」

そのことは、これまでに上梓された数多くの著書、訳書——本学附属図書館収蔵分だけで、単著書として『牧会書簡——テモテへの第一の手紙、テモテへの第二の手紙、テトスへの手紙』（日本基督教団出版局、1990年）、『聖書のなかのマリア——伝承の根底と現代』（教文館、1992年）、『教典になった宗教』（北海道大学図書刊行会、2002年）、編著書に『聖と俗の交錯——宗教学とその周辺』（北海道大学図書刊行会、1993年）、訳書に W. A. ピアブリー『新約聖書と文学批評』（ヨルダン社、1983年）、W. G. ドーティ『原始キリスト教の書簡文学』（ヨルダン社、1985年）、H. C. キー『初期キ

リスト教の社会学』（ヨルダン社、1988年）、F.ヤング『牧会書簡の神学』（新教出版社、2000年）——に示されています。

なかでも長年にわたる研究を集大成された『教典になった宗教』は、「経典は元来、文字に書き記された教えという面をもつと同時に、書物という形態によって宗教行動の中で用いられる」ものであるという「本来の経典論」に基づいて、「教えや思想の面から宗教をとらえるアプローチ」と「社会的集団行動の面で宗教をおさえるアプローチ」とを総合しようとする、まことにダイナミックかつ壮大な研究と拝読いたしました。また、前任校の北海道大学文学部宗教学研究室で主宰された研究会の成果をまとめた『聖と俗の交錯』は、現代宗教学に関する批判的反省に立ちつつ、これを「聖俗二分法」と「境界領域から中心部分へ」という問題設定から再構築しようとする、これまた刺激的な論考集でした。

これらの業績が学会をリードする研究として高評を得てきたことは、土屋教授がながらく日本宗教学会常務理事、日本基督教会会理事の役職にあったことから窺い知ることができます。それだけではありません。独立行政法人大学評価・学位授与機構学位審査会専門委員主査の重責を務めて、広く日本全体の高等教育と学術研究の向上にも貢献してこられました。

土屋教授は、高度の専門的研究に裏打ちされた高い識見と豊富な経験をもって、学部・大学院の教育と研究、運営に尽力されました。そのまことに大きなご功績に対し心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。私どもにとって土屋教授のご退職は大きな痛手ではありますが、土屋教授が示された教育と研究に対する真摯で厳しい姿勢に学ぶことで、学部・大学院の一層の充実と発展を期したいものと念じております。

土屋教授におかれては、ご退職後にご健勝で、ますますご健筆を振るわれんことを祈念申し上げますとともに、今後とも折に触れてご助言、ご指導くださるようお願いいたします。

はなはだ拙辞ではありますが、送る言葉とさせていただきます。